

青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究

長尾あゆみ* 笠井仁** 鈴木伸一***

A study of dependence tendency on friend and parents-child relationship in adolescence

Ayumi Nagao* Hitoshi Kasai** Shin-ichi Suzuki***

The purpose of this study was to investigate the dependence tendency associated with the interpersonal relationship and the parents-child relationship in adolescence. Subjects were 398 undergraduate students, who were asked to perform a set of questionnaires on dependence tendency and parents-child relationship. The results of this study showed that sex differences, existence of sibling, whether living with parents, and school year affect on their dependence tendency and parents-child relationship.

Keyword : dependence tendency, parents-child relationship

問題

青年期は親から自立し、これまでとは違った一人の人間としての自己を確立させる重要な時期である。親から離脱した青年は、その悩みや不安を語り合う対象として同性の友人へとその志向性を変化させる。Blos (1962) は、青年が親の影響から独立する過程を「第二の個体化過程」として重要視しており、皆川 (1980) は、第二の個体化過程において、親に代わる依存愛情欲求・同一化の相手として同性の友人と相互依存の関係を形成できるか否かが、適応障害など青年の様々な問題と関連しているとしている。

宮下・渡辺 (1992) は、大学生を対象に回想法を用いて中学時代、高校時代、ならびに現在 (大学時代) の友人関係の親密度とアイデンティティの関係を検討し、女性においては、親密な友人関係が自我同一性との関連で重要であることを示した。安達 (1994) は、青年期に父・母・友人・恋人などの重要な他者の果たす役割について比較・検討し、葛藤の解決・自己の安定において友人が大きな役割を果たしていることを明らかにした。さらに徳本・北山 (1992) は、男性大学生を対象にTATを実施し、その反応から、同性・異性の友人関係が自己評価と有意に関連していると報告している。

これらの結果はいずれも、青年期には友人が自己意識の形成に大きな影響を与える“重要な他者”としての役割を担っていくことを裏付けるものといえよう。これらのことから、親密な友人関係の確立は、青年にとつ

*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

**筑波大学心理学系 (Institute of Psychology, Tsukuba University)

***広島大学大学院教育学研究科付属心理臨床教育研究センター (Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

て発達的に重要な課題であることが考えられる。

青年期の友人関係を捉える観点のひとつとして依存が挙げられる。従来から、依存という概念は自立とは対極にある未熟なものとして扱われてきた。これに対して、最近の心理学では、依存と自立とは必ずしも対極概念とは考えられておらず、「依存性は人に普遍的なもので、発達に伴って消失するのではなく、より成熟したものに変わっていく」という見方がなされ始めている（関、1982）。

関（1982）は、依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、大学生男女の依存性のあり方を①依存欲求、②依存拒否、③統合された依存の3点の組み合わせによって検討している。そして、着目する点をそれぞれ以下のように定義している。まず、依存欲求とは“援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求”である。次に、統合された依存性とは“成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、又、相互依存的な、他者との良好な関係を保ち、かつ、そこから得た安心感を基礎として自立的になるために、必要不可欠な依存性”である。これは、自立的、適応的である者が行なう依存欲求の充足の仕方に関係するもので、望ましい1つの依存のあり方であると考えられている。最後に、依存の拒否とは、“顕在的には、文字通り、他者への依存を否定する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推測される態度”である。ここでいう依存不安とは、他者へ依存することへの不安のことであり、依存欲求の欠如ではない。したがって、依存の拒否とは、依存することに対するネガティブな態度のことでありと考えられている。

青年期においては友人が自己意識の形成や社会的スキルの向上に重要な役割を果たすことから、友人関係のあり方に注目することは、青年の自己形成という観点からも興味深いものであると考えられる。友人関係を依存という観点からみること、これまで言及されてこなかった友人関係の成熟の程度や友人関係への不安の程度を推し量る上でも重要であると考えられる。しかしながら、このような友人関係に独特な依存のあり方に注目してなされた研究は、これまでのところほとんど見当たらない（久米、2001）。

これまで述べてきたように、青年期の対人関係は友人関係や異性関係により重点が置かれているように思われる。しかし、実際には青年期における親と子の関係が希薄になってしまうのかと言えばそうではなく、親と子の関係はその基底において継続するのである（小高、1998）。親子関係を考える場合、「子どもに対する親の態度・行動」と「親に対する子どもの態度・行動」の2つの側面を考えることができる。前者の研究には、Schaefer（1965a, 1965b）の研究や小嶋（1969）の研究、古川（1972, 1974）の研究があげられるが、これらの結果の多くは、ほぼ一致しており、「受容—拒否」「統制—自律性」の2次元の上位概念に集約される結果となっている。また、後者の研究として、小沢・湯沢（1989a, 1989b）や高木・藤田（1988）の研究がある。小沢・湯沢（1989c）は、西平（1988）の青年期の心理的離乳のプロセスにおいて生じる心理事象を捉える5つの側面をもとにして、心理的離乳に関して、男女の比較を行っている。その結果、男性よりも女性の方が「親への甘え」が強く、女性よりも男性の方が「親から仲間への離脱」が強い結果となっていた。さらに、高木・藤田（1988）は、学生を対象に、親子関係と自己意識との関連性についての研究を行った。その結果、父母との関係が、同一性地位や自尊心と密接に関わっていることが明らかとなった。

以上のような研究結果からもわかるように、青年期後期の親子関係は青年の自我同一性や自尊心など、多くの要因と関連しており、青年期後期においても、依然として親と子の関係は重要な役割を担っていることが明らかになっている。親子関係と友人関係においては、そのどちらにも性差が存在することが多くの研究で指摘されて

いる。しかし、その他の要因については、ほとんど検討されていないように思われる。そこで本研究では、他者との関係性を捉える際に依存の概念を取り上げ、青年期後期において、親からの心理的自立の程度と友人関係への依存性について性差、居住形態、親しい異性の有無、きょうだいの有無、学年の影響を検討することを目的とする。

方法

<被調査者>

4年制大学の大学生1～4年398名。平均年齢は19.7歳（18歳～25歳）であった。自宅から通学している学生は151名、自宅外から通学している学生は245名であった。

<調査時期>

2002年10月24日～11月5日。

<調査内容>

- (1) フェイスシート：年齢、所属、学年、性別、居住（自宅通学か自宅外通学かを訊ねたもの）の記入を求めた。
- (2) 依存性尺度：関（1982）の依存性の自己評定質問紙を、依存対象が同性で同年代の友人に限定されるように久米（2001）が改めて作成した尺度。「依存欲求」「依存拒否」「統合された依存」の3つの下位尺度（それぞれ13項目）からなる39項目の質問紙で、それぞれの下位尺度の項目をランダムに配置した。「全く当てはまらない」を1点、「あまり当てはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「かなり当てはまる」を4点、「非常によく当てはまる」を5点とする、5段階評定であった。
- (3) 親—青年関係尺度：小高（1999）が作成した自己評定質問紙 25項目で「親からのポジティブな影響の因子」「親との対立の因子」「親への服従の因子」「親との情愛の絆の因子」「一人の人間として親を認知する因子」の5つの下位尺度からなる。「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの5段階評定であった。
- (4) 家族関係：きょうだいの有無、何人きょうだいの何番目であるか、きょうだい構成についてたずねた。さらに、両親の有無、何歳で生別または死別したかについてたずねた。
- (5) 親しい異性：現在特に親しくしている異性の有無についてたずねた。

<手続き>

個別配布個別回収形式の質問紙調査で実施された。回答はいずれも無記名で行われた。

結果

1. 依存性尺度の検討

依存性尺度39項目について因子分析（主因子法、varimax回転）を行った結果をTable 1に示した。負荷量が0.4に満たない項目、および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除き、再度因子分析を行った。その結果、3つの因子が抽出された。各因子の寄与率は、第1因子12.92%、第2因子11.99%、第3因子11.19%で、この3因子による累積寄与率は36.10%であった。第1因子は12項目、第2因子は11項目、第3因子は7項目で構成され、それぞれ因子構造が関（1982）によって出された「依存欲求」尺度、「依存の拒否」尺度、「統合された

依存」尺度に対応することから、「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」と命名した。

Table1 友人への依存性尺度の因子分析結果

| Item | Factor I | Factor II | Factor III |
|--|----------|-----------|------------|
| 17. 何かする時には、気を配って、はげましてもらいたい。 | .638 | .056 | .120 |
| 35. 何か迷っている時には、友人に「これでいい？」と聞きたい。 | .636 | -.137 | .039 |
| 22. 困っている時や、悲しい時には、友人に気持ちをわかってもらいたい。 | .620 | -.031 | .279 |
| 11. 一人で決心がつかねる時には、友人の意見に従いたい。 | .610 | -.068 | -.010 |
| 36. 重大な決心をする時にはいつも、友人の意見が聞きたい。 | .609 | -.130 | .165 |
| 19. 何かにつけて、友人に味方になってほしい。 | .565 | .056 | .043 |
| 13. できるところなら、いつも友人といたい。 | .541 | -.048 | .131 |
| 7. 病気の時や、ゆううつなときには、友人に同情してもらいたい。 | .540 | -.009 | .084 |
| 26. 友人から、「元気？」などと気を配ってもらいたい。 | .533 | .008 | .101 |
| 10. むずかしい仕事をするときには、できたら友人と一緒にいたい。 | .484 | -.069 | .067 |
| 29. 悪い知らせ、悲しい知らせなどを受け取る場合には、友人と一緒にいたい。 | .431 | -.084 | .221 |
| 3. できることなら、どこへ行くにも友人と一緒にいきたい。 | .415 | -.100 | .093 |
| 16. 友人に頼る立場になると、どうも落ち着かない。 | -.099 | .678 | .011 |
| 27. 安心して友人の世話になれないほうだ。 | -.045 | .660 | -.247 |
| 8. 友人の世話になるのは、恥ずかしいと思う。 | -.125 | .628 | -.234 |
| 5. 自分のために、友人に何かやってもらうのは苦手だ。 | -.178 | .606 | -.021 |
| 31. 友人に頼みごとをするのは、どんな時でも、非常な決心がいる。 | .098 | .564 | -.051 |
| 9. 恩返しできないなら、友人に援助を求めるのは、ためらわれる。 | -.028 | .535 | -.018 |
| 33. 友人に行為を示されると、とまどうことが多い。 | .078 | .527 | -.209 |
| 20. 友人には、絶対借りをつくりたくない。 | .035 | .526 | -.067 |
| 21. 親しい間柄の友人にでも、甘えることのないほうだ。 | -.295 | .517 | -.138 |
| 38. 自分の事を友人に相談するのは、何か不安である。 | -.016 | .485 | -.350 |
| 4. どんな困った時でも、友人に頼らないほうだ。 | -.347 | .461 | -.130 |
| 24. 心の支えになってくれる友人がいる。 | .148 | -.227 | .759 |
| 32. 自分を見守ってくれているように思う友人がいるので、大事な場面も切り抜けられる。 | .218 | -.054 | .739 |
| 34. 自分の信頼できる友人がいるので安心だ。 | .054 | -.332 | .733 |
| 39. 思い出すだけで、心安らかになる友人がいる。 | .205 | -.028 | .696 |
| 30. 私がどんなことをしようと理解してくれる友人がいる。 | .124 | -.107 | .675 |
| 15. 友人のことを思い浮かべて、元気を出すことがある。 | .282 | -.031 | .566 |
| 23. 自分と友人の立場を尊重しつつ、必要な時には、うまく頼ったり頼られたりするほうだ。 | .158 | -.272 | .450 |
| 固有値 | 7.95 | 3.85 | 2.61 |
| 寄与率 | 12.92 | 11.99 | 11.19 |

次に、友人への依存性における各尺度の信頼性を確認するために、Cronbach の α 係数を用いて信頼性係数を算出したところ、友人への依存性尺度の依存欲求因子で $\alpha=.85$ 、依存拒否因子で $\alpha=.85$ 、統合された依存因子で $\alpha=.86$ であった。また、依存性尺度の男女別平均と標準偏差を Table2-1 に示した。男性と女性において、各尺度の平均得点について t 検定を行ったところ、「依存」において女性が高く、1%水準で有意であった ($t(398) = 3.43, p < .01$)。「拒否」においては有意な差は認められなかった ($t(398) = 1.44, n.s.$)。また「統合」においても女性が高く、1%水準で有意であった ($t(398) = 5.24, p < .01$)。

さらに、依存性尺度について、居住形態 (自宅通学生・自宅外通学生)、親しい異性の有無 (親しい異性あり・親しい異性なし)、きょうだいの有無 (きょうだいあり・きょうだいなし)、学年 (1・2年生・3・4年生) と性別 (男性・女性) について2要因の分散分析をそれぞれ行ったところ、「依存」において学年の主効果が有意であり ($F(2,72) = 6.95, p < .01$)、1・2年生のほうが高かった。その他の主効果についてはどれも有意な差は認められず、交互作用も認められなかった (Table2-2)。

Table 2-1 友人への依存における男女別平均得点と標準偏差ならびにt検定の結果

| | 男性=145 | | 女性=253 | | t値 |
|-------------------------|--------|-----|--------|-----|---------|
| | M | SD | M | SD | |
| <友人への依存尺度> | | | | | |
| 依存欲求 | 2.96 | .69 | 3.18 | .60 | 3.43 ** |
| 依存拒否 | 2.71 | .60 | 2.61 | .65 | 1.44 |
| 統合された依存 | 3.34 | .80 | 3.73 | .68 | 5.24 ** |

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 2-2 友人への依存欲求における男女別、学年別の2要因の分散分析結果

| | 分散分析 | | 性別の主効果 | 学年の主効果 | 交互作用 |
|----|-----------|-----------|-----------|----------|------------|
| | 1・2年生 | 3・4年生 | | | |
| 男性 | 3.01(.70) | 2.79(.64) | F=13.43** | F=6.95** | F=.69 n.s. |
| 女性 | 3.25(.52) | 3.08(.68) | | | |

注)** $p < .01$

2. 親-青年関係尺度の検討

親-青年関係尺度25項目について、父親と母親別に因子分析(主因子法, varimax回転)を行った結果をTable3とTable4に示した。小高(1999)を参考にして5因子を抽出した。その結果、負荷量が0.3以上の因子を採用すると、父親-青年関係と母親-青年関係のどちらにもほぼ同じ因子構造が得られた。父親-青年関係尺度の「ひとりの人間として父親を認知する」因子の「自分の生き方は父親の生き方とは別の独自のものだ」という項目の因子負荷量が.275であった。この項目に関しては基準より若干低い固有値となっているが、母親-青年関係尺度との対応をみて採用することにした。

父親-青年関係尺度の寄与率は第1因子13.81%、第2因子11.47%、第3因子9.96%、第4因子8%、第5因子7.2%で、この5因子による累積寄与率は50.44%であった。第1因子から第5因子は5項目で構成され、それぞれ、小高(1999)の「親に対する情愛的絆の因子」、「親からのポジティブな影響の因子」、「親との対立の因子」、「親への服従の因子」、「一人の人間として親を認知する因子」と全く同じであったため、順に「父親との情愛的絆」、「父親からのポジティブな影響」(以下「父親からの影響」)、「親との対立」、「父親への服従」、「一人の人間として父親を認知する」因子(以下、「一人の人間としての父親」)と命名した。

また、母親-青年関係尺度の寄与率は第1因子13.39%、第2因子11.30%、第3因子11.02%、第4因子8.94%、第5因子8.88%で、この5因子による累積寄与率は53.53%であった。第1因子から第5因子は5項目で構成され、それぞれ小高(1999)の「親との情愛的絆の因子」、「親からのポジティブな影響の因子」、「親との対立の因子」、「一人の人間として親を認知する因子」、「親への服従の因子」と同様の因子構造であったため、順に「母親との情愛的絆」、「母親からのポジティブな影響」(以下、「母親からの影響」)、「母親との対立」、「一人の人間と

Table 3 父親—青年関係の因子分析結果

| Item | Factor I | Factor II | Factor III | Factor IV | Factor V |
|--------------------------------------|----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 21. 父親に対して感謝の気持ちを持っている。 | .806 | .295 | -.093 | .033 | .009 |
| 7. 父親に対してこれからは、親孝行をしたい。 | .765 | .196 | -.040 | .146 | .010 |
| 17. 最近、父親のありがたみを感じるがよくある。 | .752 | .337 | -.078 | .170 | .049 |
| 13. 父親に対していたわってあげたい。 | .667 | .140 | -.092 | .073 | .065 |
| 10. 自分が今安心して生活できるのは、父親の存在があるからだ。 | .640 | .239 | -.100 | .155 | -.025 |
| 20. 父親によって人生観が深められた。 | .247 | .767 | .016 | .175 | .035 |
| 4. 父親によって自分の視野が広がった。 | .267 | .753 | -.114 | .141 | -.034 |
| 5. 自分の価値観には、父親の価値観が影響している。 | .275 | .603 | -.045 | .225 | -.055 |
| 15. 父親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。 | .268 | .582 | -.082 | .143 | .134 |
| 9. 私が何かを決める際、父親の意見は十分参考になると思う。 | .425 | .537 | -.204 | .239 | -.071 |
| 19. 私と父親の言うことはいつも対立する。 | -.146 | -.142 | .830 | -.016 | -.025 |
| 6. 父親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。 | -.016 | -.041 | .701 | -.065 | -.071 |
| 2. 私の意見や考え方が父親に伝わらず、イライラすることが多い。 | -.110 | -.098 | .693 | -.031 | .056 |
| 22. 自分の進路、生き方などのことで父親と対立することがある。 | .012 | .086 | .555 | .113 | .078 |
| 12. 父親の価値観に疑問を思っている。 | -.316 | -.284 | .472 | -.043 | .162 |
| 25. 私は父親の言う通りに生きています。 | .058 | .063 | .110 | .687 | -.028 |
| 8. 父親に逆らえないで、言う通りになってしまいやすい。 | .005 | .087 | .150 | .646 | -.108 |
| 3. 自分の意見と父親の意見が違う時、父親の意見に左右されやすい。 | .168 | .323 | -.039 | .551 | -.061 |
| 16. 父親のいうことにはいつも従っている。 | .272 | .327 | -.298 | .519 | -.055 |
| 23. 父親の期待にそった生き方をしている。 | .166 | .114 | -.087 | .340 | .073 |
| 14. やっぱ父親も一人の人間だと思うようになった。 | .181 | .102 | -.010 | -.010 | .772 |
| 1. 父親も一人の人間だと思って接している。 | .121 | .102 | -.072 | .032 | .754 |
| 24. 父親のことを一人の人間として客観的に見ている。 | -.115 | -.062 | .032 | -.024 | .559 |
| 18. 父親と私の人生は違う。 | -.037 | -.067 | .164 | -.256 | .380 |
| 11. 自分の生き方は父親の生き方とは独自のものだ。 | -.086 | -.143 | .179 | -.227 | .275 |
| 固有値 | 6.87 | 2.65 | 2.47 | 1.68 | 1.28 |
| 寄与率 | 13.81 | 11.47 | 9.96 | 8.00 | 7.20 |

Table 4 母親—青年関係の因子分析結果

| Item | Factor I | Factor II | Factor III | Factor IV | Factor V |
|--------------------------------------|----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 21. 母親に対して感謝の気持ちを持っている。 | .836 | .200 | -.124 | .084 | .017 |
| 7. 母親に対してこれからは、親孝行をしたい。 | .764 | .258 | -.103 | .087 | .098 |
| 17. 最近、母親のありがたみを感じるがよくある。 | .744 | .262 | -.059 | .027 | .125 |
| 10. 自分が今安心して生活できるのは、母親の存在があるからだ。 | .739 | .193 | -.110 | .014 | .040 |
| 13. 母親に対していたわってあげたい。 | .620 | .135 | -.046 | .096 | .115 |
| 20. 母親によって人生観が深められた。 | .280 | .810 | -.088 | .104 | .057 |
| 4. 母親によって自分の視野が広がった。 | .326 | .736 | -.121 | -.023 | .038 |
| 15. 母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。 | .194 | .599 | -.024 | .167 | .046 |
| 5. 自分の価値観には、母親の価値観が影響している。 | .246 | .583 | -.104 | .048 | .274 |
| 9. 私が何かを決める際、母親の意見は十分参考になると思う。 | .362 | .551 | -.256 | -.078 | .240 |
| 19. 私と母親の言うことはいつも対立する。 | -.154 | -.093 | .797 | .007 | -.097 |
| 6. 母親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。 | .007 | .055 | .767 | -.045 | -.061 |
| 2. 私の意見や考え方が母親に伝わらず、イライラすることが多い。 | -.031 | -.175 | .747 | .079 | -.036 |
| 22. 自分の進路、生き方などのことで母親と対立することがある。 | -.094 | -.020 | .605 | .003 | .031 |
| 12. 母親の価値観に疑問を思っている。 | -.174 | -.298 | .483 | .084 | -.033 |
| 1. 母親も一人の人間だと思って接している。 | .055 | .203 | -.050 | .780 | .007 |
| 14. やっぱ母親も一人の人間だと思うようになった。 | .079 | .176 | -.047 | .775 | .015 |
| 24. 母親のことを一人の人間として客観的に見ている。 | -.033 | .047 | .007 | .710 | -.074 |
| 18. 母親と私の人生は違う。 | .151 | -.200 | .181 | .466 | -.218 |
| 11. 自分の生き方は母親の生き方とは独自のものだ。 | .142 | -.244 | .163 | .379 | -.238 |
| 25. 私は母親の言う通りに生きています。 | .039 | -.066 | .093 | -.014 | .774 |
| 8. 母親に逆らえないで、言う通りになってしまいやすい。 | .025 | .057 | .289 | -.193 | .605 |
| 16. 母親のいうことにはいつも従っている。 | .175 | .137 | -.240 | -.062 | .583 |
| 23. 母親の期待にそった生き方をしている。 | .122 | .082 | -.137 | .069 | .572 |
| 3. 自分の意見と母親の意見が違う時、母親の意見に左右されやすい。 | .041 | .235 | -.020 | -.171 | .541 |
| 固有値 | 6.19 | 3.16 | 2.75 | 1.89 | 1.61 |
| 寄与率 | 13.39 | 11.30 | 11.02 | 8.94 | 8.88 |

して母親を認知する」因子（以下、「一人の人間としての母親」）、「母親への服従」と命名した。

各尺度の信頼性を確認するために、Cronbachの α 係数を用いて信頼性係数を算出したところ、「父親からのポジティブな影響」で $\alpha=.86$ 、「父親との対立」で $\alpha=.79$ 、「父親への服従」で $\alpha=.72$ 、「父親との情愛的絆」で $\alpha=.88$ 、「一人の人間としての父親」で $\alpha=.68$ 、「母親からのポジティブな影響」で $\alpha=.85$ 、「母親との対立」で $\alpha=.81$ 、「母親への服従」で $\alpha=.75$ 、「母親との情愛的絆」で $\alpha=.88$ 、「一人の人間としての母親」で $\alpha=.76$ であった。

次に、親-青年関係尺度の男女別平均得点と標準偏差をTable5-1に示した。男性と女性において、各尺度の平均得点について t 検定を行ったところ、「父親からの影響」においては男性のほうが高く、5%水準で有意であった($t(398)=2.04, p<.05$)。「父親との対立」、「父親への服従」、「父親との情愛的絆」、「一人の人間としての父親」においては有意な差は認められなかった(順に $t(398)=.69, n.s., t(398)=.31, n.s., t(398)=.63, n.s., t(398)=.09, n.s.$)。また、「母親からの影響」においては女性のほうが高く、1%水準で有意であった($t(398)=3.08, p<.01$)。さらに、「母親への服従」においても女性が高く、1%水準で有意であった($t(398)=3.55, p<.01$)。「母親との情愛的絆」においても女性のほうが高く1%水準で有意であった($t(398)=4.02, p<.01$)。「母親への対立」と「一人の人間としての母親」では有意な差は認められなかった(順に $t(398)=1.13, n.s., t(398)=.94, n.s.$)。

さらに、親-青年関係尺度について、居住形態、親しい異性の有無、きょうだいの有無、学年のそれぞれと性別について2要因の分散分析をそれぞれ行ったところ、「父親からの影響」においては、きょうだいの有無の主効果が有意であり($F(3.48)=4.18, p<.05$)、きょうだいがいる人のほうがきょうだいのない人よりも「父親からの影響」が高かった(Table5-2)。また、「父親との情愛的絆」においては、居住ときょうだいの主効果が有意であり($F(5.38)=7.98, p<.01, F(3.63)=5.34, p<.05$)、自宅通学生よりも自宅外通学生のほうが、きょう

Table 5-1 親との関係における男女別平均得点と標準偏差ならびに t 検定の結果

| | 男性=145 | | 女性=253 | | t 値 |
|----------------------|--------|------|--------|------|---------|
| | M | SD | M | SD | |
| <親との関係> | | | | | |
| 父親からの影響 | 3.53 | .93 | 3.33 | .90 | 2.04 * |
| 父親との対立 | 2.54 | .80 | 2.60 | .91 | .69 |
| 父親への服従 | 2.39 | .68 | 2.38 | .71 | .31 |
| 父親との情愛的絆 | 4.00 | .89 | 4.05 | .79 | .63 |
| 一人の人間としての父親 | 3.90 | .69 | 3.91 | .66 | .09 |
| 母親からの影響 | 3.63 | .87 | 3.89 | .72 | 3.08 ** |
| 母親との対立 | 2.72 | .80 | 2.62 | .89 | 1.13 |
| 母親への服従 | 2.40 | .74 | 2.67 | .73 | 3.55 ** |
| 母親との情愛的絆 | 4.30 | .74 | 4.56 | .52 | 4.02 ** |
| 一人の人間としての母親 | 3.96 | .71 | 4.03 | .67 | .94 |

注) ** $p<.01, *$ $p<.05$.

だいがいる人のほうがきょうだいのいない人よりも「父親との情愛的絆」が高いことが示された(順に Table5-3, 5-4)。「一人の人間としての父親」においては居住の主効果が有意であり ($F(2.05) = 4.66, p < .05$), 自宅通学生よりも自宅外通学生のほうが「一人の人間としての父親」が高かった (Table5-5)。そして、「母親との対立」においては、きょうだいの有無の主効果に有意傾向があり ($F(2.73) = 3.75, p < .10$), きょうだいがいない人のほうがきょうだいのいる人よりも「母親との対立」が高い傾向が示された (Table5-6)。「母親への服従」においては、居住の主効果に有意傾向があり ($F(1.55) = 2.91, p < .10$), 自宅外通学生よりも自宅通学生のほうが「母親への服従」が高い傾向があった (Table5-7)。さらに、「一人の人間としての母親」においては、交互作用が有意であった ($F(2.46) = 5.41, p < .01$) (Table5-8)。単純主効果の検定を行ったところ、女性においては、自宅通学生と比較して自宅外通学生のほうが「一人の人間としての母親」が高いことが示され、自宅外通学生においては、男性と比較して女性のほうが「一人の人間としての母親」が高いことが示された。また、「母親との対立」においては、交互作用が有意であった ($F(4.68) = 6.47, p < .05$) (Table5-9)。親しい異性の有無別の単純主効果を検定したところ、男性において有意であった ($F(3.24) = 5.27, p < .05$)。また性別の単純主効果を検定したところ、親しい異性がいない人において有意であった ($F(4.41) = 6.46, p < .05$)。つまり、親しい異性がいない人において、女性よりも男性のほうが「母親との対立」が高いことが示された。

Table 5-2 父親からの影響における男女別、きょうだいの有無別の2要因の分散分析結果

| | きょうだいあり | きょうだいなし | 分散分析 | | |
|----|-----------|-----------|----------------|--------------|----------------|
| | | | 性別の主効果 | きょうだいの主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 3.55(.94) | 3.03(.96) | $F = .20$ n.s. | $F = 4.18^*$ | $F = .21$ n.s. |
| 女性 | 3.36(.90) | 3.03(.80) | | | |

注)* $p < .05$

Table 5-3 父親との情愛的絆における男女別、居住別の2要因の分散分析結果

| | 自宅通学生 | 自宅外通学生 | 分散分析 | | |
|----|------------|-----------|--------------------|-----------------|----------------|
| | | | 性別の主効果 | 居住の主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 3.70(1.06) | 4.06(.85) | $F = 2.85^\dagger$ | $F = 7.98^{**}$ | $F = .49$ n.s. |
| 女性 | 3.95(.82) | 4.17(.74) | | | |

注)** $p < .01, \dagger p < .10$

Table 5-4 父親との情愛的絆における男女別、きょうだいの有無別の2要因の分散分析結果

| | きょうだいあり | きょうだいなし | 分散分析 | | |
|----|-----------|------------|----------------|--------------|----------------|
| | | | 性別の主効果 | きょうだいの主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 4.02(.88) | 3.46(1.18) | $F = .94$ n.s. | $F = 5.34^*$ | $F = .46$ n.s. |
| 女性 | 4.07(.79) | 3.77(.71) | | | |

注)* $p < .05$

Table 5-5 一人の人間としての父親における男女別, 居住別の2要因の分散分析結果

| | 自宅通学生 | 自宅外通学生 | 分散分析 | | |
|----|-----------|-----------|-------------|------------|-------------|
| | | | 性別の主効果 | 居住の主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 3.79(.79) | 3.92(.67) | $F=35$ n.s. | $F=4.66^*$ | $F=37$ n.s. |
| 女性 | 3.79(.71) | 4.02(.58) | | | |

注) * $p < .05$

Table 5-6 母親との対立における男女別, きょうだいの有無別の2要因の分散分析結果

| | きょうだいあり | きょうだいなし | 分散分析 | | |
|----|-----------|------------|-------------|------------------|-------------|
| | | | 性別の主効果 | きょうだいの主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 2.69(.80) | 3.09(.76) | $F=34$ n.s. | $F=3.75^\dagger$ | $F=01$ n.s. |
| 女性 | 2.60(.87) | 2.95(1.09) | | | |

注) $^\dagger p < .10$

Table 5-7 母親への服従における男女別, 居住別の2要因の分散分析結果

| | 自宅通学生 | 自宅外通学生 | 分散分析 | | |
|----|-----------|-----------|---------------|------------------|-------------|
| | | | 性別の主効果 | 居住の主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 2.47(.78) | 2.39(.73) | $F=7.39^{**}$ | $F=2.91^\dagger$ | $F=68$ n.s. |
| 女性 | 2.79(.78) | 2.56(.67) | | | |

注) $^{**} p < .01, \dagger p < .10$

Table 5-8 一人の人間としての母親における男女別, 居住別の2要因の分散分析結果

| | 自宅通学生 | 自宅外通学生 | 分散分析 | | |
|----|-----------|-----------|-------------|-------------|---------------|
| | | | 性別の主効果 | 居住の主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 4.11(.67) | 3.93(.72) | $F=03$ n.s. | $F=03$ n.s. | $F=5.41^{**}$ |
| 女性 | 3.93(.70) | 4.14(.62) | | | |

注) $^{**} p < .01$

Table 5-9 母親との対立における男女別, 親しい異性の有無別の2要因の分散分析結果

| | 親しい異性あり | 親しい異性なし | 分散分析 | | |
|----|-----------|-----------|-------------|-------------|------------|
| | | | 性別の主効果 | 親しい異性の主効果 | 交互作用 |
| 男性 | 2.54(.73) | 2.85(.82) | $F=42$ n.s. | $F=74$ n.s. | $F=6.47^*$ |
| 女性 | 2.70(.73) | 2.55(.83) | | | |

注) * $p < .05$

考 察

1. 性差による検討

性差について検討した結果、友人への依存性尺度については「依存欲求」と「統合された依存」がともに男性よりも女性が高いことが示された。「依存欲求」が男性よりも女性が高いことは、様々な先行研究においても明らかにされている(久米, 2001; 関, 1982 など)。これらの結果は、社会的に女性は依存することが受容される一方で、男性は自立を求められる傾向があるという社会背景を反映していると考えられる。また、男女で友人との付き合い方が異なることは従来の研究においてよく指摘されている。和田(1993)によると、男性友人関係は手段的であり、同じことをするのが好きな人を友人として求めるのに対し、女性友人関係は情緒的であり、相互依存と自己開示を友人に対して望むといわれている。このように男女での友人の位置づけが異なり、相手に求めるものの質や関係の持ち方に違いがあることも、性差が見られた原因の一つであると考えられる。一方、統合された依存については、それが友人関係の成熟の度合いを表すことから、男性よりも女性のほうが友人関係において成熟しているということが示された。しかし、その結果のみから男性は依存のあり方が未熟で自律性が低いと結論づけるのは避けるべきであると考えられる。前述のように、男性は女性に比べて、人に頼らないという行動期待を内在化しているために、依存性の存在そのものを意識しにくい、または認めにくいと考えられ、質問紙という本調査の方法の限界から、依存性の存在が十分に反映されなかった可能性が考えられる。次に、親-青年関係尺度の性差をみてみると、男性のほうが女性よりも「父親からのポジティブな影響」が高く、女性のほうが男性よりも「母親からのポジティブな影響」が高かった。これらの結果は、人生観が深められたことや視野が広がったことなどのポジティブな影響を、同性の親からより強く与えられていることを示している。同性の親のほうが価値観や好みなどが一致しやすく、話をする機会が多いことが原因の一つであると考えられる。幼児期のある年齢になると男の子は父親に、女の子は母親に自分を同一視させて、性役割を身につけていくという社会的学習理論からも、同性の親からよりポジティブな影響を受けやすいことが予測できる。母親と娘の関係を見ると、女性のほうが母親により多く従っており、母親との情愛的絆も強いという結果であった。これは、従来から指摘されている通り、母-娘の関係はより親密であることを示すものである。このことは、母・娘結合の心性は最も自然で根源的であるという河合(1980)の指摘とも一致すると思われる。さらに河合(1999)によると、子どもは母親から生まれてくるため、子どもと母親が結びつくのは自然なことであり、特に「母と娘」関係は最も一体感のある関係であると考えている。本研究における母親と娘の関係は親密であるという結果は、河合の述べていることと一致していると思われる。少なくとも、わが国において、母-娘関係は他の組み合わせに比べて特別なものであることが予想される。

2. 居住形態による検討

居住形態が影響を及ぼしていたのは、親-青年関係尺度の「父親との情愛的絆」と「一人の人間としての父親」であり、自宅外通学生のほうが自宅通学生よりも高かった。この結果は、自宅外通学生のほうが、一緒に住んでいない分、親との距離を適度に保てており、自宅通学生よりも父親のよい面を認識したり、情愛的絆を感じやすくなったりするからではないかと考えられる。さらに、離れて暮らしているため、より客観的に父親を一人の人間として認識しやすいことも推測された。しかしもう一方で、母親との関係においては有意な差は認められなかった。このことは、先にも述べたように母親と子どもとの結びつきのほうが父親に比べて強く、一緒に暮ら

してなくても、母親のほうが子どもと連絡をとる機会が多いことから、適度な距離を保てていない人がいることが関係していると考えられる。このことは、自宅通学生のほうがより多く母親へ服従しているという結果からもうかがえる。自宅で暮らしていると、特に母親からの支配を受けてしまいやすいという必然的な結果を招くのであろう。こういった結果が出たのは、親との物理的・心理的な距離の要因が原因の一つであると考えられ、それが親-青年関係に影響を及ぼしていることが示唆された。自宅から通学している人は親との距離が近くなりすぎ、自宅外通学生よりも親との適度な距離を保つことが困難になった結果、親との関係が自宅外通学生よりも悪くなってしまいやすいということが考えられる。一方、自宅通学か自宅外通学かという要因については、友人への依存性に有意な差はみられなかったことから、居住の形態は友人への依存性には影響しないことが示唆された。しかし、親から離れて生活することが親との心理的離乳を促し、自立を促進させるという西平(1990)の示唆も無視できないものであり、より詳細な研究が今後の課題となるであろう。

3. 親しくしている異性の有無による検討

親しくしている特定の異性の有無については、依存欲求、依存拒否、統合された依存のいずれにおいても有意な差は認められなかった。つまり、特に親しくしている特定の異性の有無は、友人への依存性には影響しないという結果であった。青年期の女子においては、愛情の対象(恋人)を持つことによって依存欲求が増大する(高橋, 1968)という知見があるが、本研究では依存対象を同性の友人に限ったために差が出なかったのではないかと推察される。一方、それとは反対に親しくしている特定の異性がいることで、友人への依存欲求が低くなることも考えられたが、大学生の恋愛には、人によってその内容や考え方が大きく異なるという多様性が指摘されている(松井, 1996)ため、一概に親しい異性の有無が友人への依存性に影響を及ぼしているとはいえないのであろう。この点に関しては、親密なカップルと親密でないカップルでは、二人の間に対立や葛藤が起こったときに、とる行動が異なっているという中村(1991)の研究からも示唆されるように、その二人の親密度やどういったつきあいをしているのかという視点も含めて、今後さらなる検討が必要であろう。また、親-青年関係尺度のどの因子についても、親しい異性の有無によって有意な差は認められなかった。親しくしている特定の異性の有無は、友人への依存性にも関係しておらず、親との関係においても有意な差はみられなかったことから、大学生の恋愛は多様であり、その考え方や付き合い方には大きな幅があることがここでも示唆される結果となった。

4. きょうだいの有無による検討

さらに、きょうだいの有無については、友人への依存性における有意な差は認められなかった。ひとりっ子には、利己的であると不適應であるとかいうような好ましくない印象がもたれやすいが、それはひとりっ子がきょうだいの相互交渉を経験しないので、社会生活に必要な対人的経験が欠如するためと考えられる(清水, 1986)。そのため、きょうだいの有無が友人への依存性に影響を与えることが予測されたが、結果に有意な差はみられなかった。このことから、きょうだい関係を経験しなくても、ひとりっ子は、その後の家庭の外での関わりのなかで友人関係を発展させていき、遅くとも青年後期である大学生になる頃までには、きょうだいがいる人と同じくらいに友人関係を成熟させていくことが推察された。また、親-青年関係尺度については、「父親からのポジティブな影響」と「父親との情愛的絆」できょうだいがいる人のほうが各得点が高いという結果であった。ひとりっ子の母親については、子どもよりも自分を大切に考える傾向が強く、子どもを育てることより自分の仕

事や趣味を優先させる傾向があることが指摘されている(依田, 1978)が、父親についてもこういった傾向が認められる可能性があるといえる。また、「母親との対立」ではきょうだいのない人のほうが高いという結果がでており、ひとりっ子の母親は具体的な養育場面でしつけがきびしくしすぎたり、子どもの年齢や能力以上のことを子どもに期待したり、子どもへの愛情が不足したりする(依田, 1978)のために、きょうだいのないひとりっ子のほうが母親に対してより反発しやすいのではないかと考えられる。このように、きょうだいの有無によっては、親との関係に多少の違いがみられ、それが大学生になっても継続しているということは興味深い。きょうだいの有無は親との関係においては影響を及ぼしているが、友人への依存性については本研究では有意な差は認められなかった。本研究では友人への依存性にのみ焦点を当てたため有意な差が出なかったとも考えられる。きょうだいの有無が友人関係に及ぼす影響については、今後は依存性尺度とは異なる尺度を用いるなどして再検討する必要があるであろう。

5. 学年による検討

学年の影響については、友人への依存欲求においては1・2年生が高いという結果であった。大学生における「依存欲求」については、それを有していることが特に肯定的な意味も否定的な意味も持たないことが示唆されている(関, 1982)。本研究の結果から、1・2年生の「依存欲求」が高かったのは、1・2年生、特に1年生は大学に入ってまだ間もないこともあり、周囲の状況に適応していくために友人への依存欲求が高くなったのではないかと推察される。3・4年生になると、大学にも適応していき、自分の生活にある程度確立しているために、依存欲求の度合いが1・2年生よりは低い結果となったのであろうと考えられる。一方、親-青年関係尺度においてはどの因子においても学年の影響が認められなかった。しかし、母親への服従においては交互作用が有意傾向であり、男性においては3・4年生よりも1・2年生のほうが母親により多く服従していたが、女性においてはそういう傾向はみられないことが示された。したがって、男性においてのみ学年が上がるにつれて、母親の服従・束縛から抜け出していくことが推察された。しかし、女性においては学年に関係なく母親に服従しており、ここでも女性においては母親との心理的離乳の困難さが示されたといえる。これらの結果から、大学生においては親との関係に学年のみの要因による差がみられないことが明らかになった。友人への依存性との関連で考えると、大学生になると親との関係は変化しないが、友人との関係は発展し続けていることが示唆された。つまり、いったん親との心理的離乳を果たした青年と親との関係はひとまずは安定するが、それから自我同一性を達成していき、異性との親密な関係を成立させるためには、同性友人との関係を成熟させていく必要があることが推察されるのである。このことは、Erikson (1959) が漸成発達理論の中で、周囲の友人や先輩などを重要な基準として自我同一性を達成していくことが青年期の課題であるとしたことを指摘したことや、Havighurst (1953) が青年期の発達課題として「同年代の同性や異性の仲間とより成熟した関係を形成すること」を挙げていることから裏付けられる。

本研究の結果から、学年が友人への依存性に影響を及ぼしており、居住形態ときょうだいの有無が親との関係に影響を与え、また性差がそのどちらにも影響していることが明らかとなった。こういった要因が、どのようなメカニズムで友人関係や親子関係に影響を及ぼしているのかを詳細に検討していくことによって、青年期の友人関係や親子関係の改善をはかるひとつの提言になりうるのではないかと考えられる。

引用文献

- 安達喜美子 1994 青年期における意味ある他者の研究—とくに異性の友人(恋人)の意味を中心として— 青年心理学研究, 6, 19-27.
- Blos, P. 1962 *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. Free Press. 野沢栄司(訳) 1971 青年期の精神医学 誠信書房.
- 土居健郎 2001 続「甘え」の構造 弘文堂.
- 江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- エリクソン, E. H. 小此木圭吾(訳) 1973 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.
- (Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. International Universities Press.)
- 古川綾子 1972 親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動測定について 実験心理学研究, 12, 41-51.
- 古川綾子 1974 両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究 教育心理学研究, 22, 69-79.
- 古澤頼雄 1991 「特集 生涯発達—心理学からみた生涯発達論—」 教育と医学, 39, 795-801.
- ハヴィガースト, R. J. 庄司雅子(訳) 1958 人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで— 牧書店.
- (Havighurst, R. J. 1958 *Human development and education*. Longmans, Green & Co.)
- Hill, J. P. Early adolescence: A research agenda. *Journal of early adolescence*, 3, 1-21.
- Kagan, J., & Mussen, P. H. 1956 Dependency themes on the TAT and group conformity. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 29-32.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造(心理学モノグラフ, 14) 東京大学出版会.
- 河合隼雄 1999 「今、日本人にとって家族とは」 甲南大学学生相談室紀要, 6, 2-16.
- 河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ—青年期の問題— 岩波書店.
- 河合隼雄 1980 『家族関係を考える』 講談社.
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要(人文科学編), 18, 55-70.
- 国眼真理子 1994 女子青年の親子関係 岡本祐子・松下美知子(編) 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版, Pp118-131.
- 小高 恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46 (3), 333-342.
- 小高 恵 1999 親—青年関係尺度作成の試み
- 久米禎子 2001 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要(京都大学大学院教育学研究科II編), 47, 488-499.
- 松原達哉・鄧 秀 1990 一人っ子の自主性と子どもから見た養育態度に関する研究—中国と日本の比較— 筑波大学心理学研究, 12, 175-190.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 青年期における友人関係 齊藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハン

ドブック 川島書店 Pp283-296.

松井 豊 1996 親離れから異性との親密な関係の成立まで 齊藤誠一(編) 青年期の人間関係 培風館 Pp49-50.

皆川邦直 1980 青春期・青年期の精神分析的発達論 小此木啓吾(編) 青年の病理2 弘文堂

宮下一博・渡辺朝子 1993 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部紀要, 40, 107-111.

西平直喜 1990 成人になること 人間の発達4 東京大学出版会.

岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.

小沢一仁・湯沢理恵子 1989a 親と子の絆の研究—1 (青年期の心理的離乳についての質問紙の作成) 日本心理学会第31回総会発表論文集, 165.

小沢一仁・湯沢理恵子 1989b 親と子の絆の研究—2 (青年期の同一性と親子関係) 日本心理学会第31回総会発表論文集, 166.

小沢一仁・湯沢理恵子 1989c 青年期の心理的離乳と同一性—心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連— 帝京学園短期大学研究紀要, 3, 63-74.

Schaefer, E.S. 1965a Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development* 36, 413-424.

Schaefer, E.S. 1965b A configurational analysis of children's reports of parental behavior. *Journal of Consulting Psychology* 29, 552-557.

清水弘司 1986 きょうだい関係 島田和夫(監) 第4巻家族関係の人間関係(I)総論 プレーン出版 Pp91-116.

高木秀明・藤田仁美 1988 親子関係と青年の自己意識—自我同一性, 自尊感情との関連— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 360-361.

高橋恵子 1968 依存性の発達の研究I —大学生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 7-16.

徳本 祥・北山 修 1992 重要な他者による受容と自己評価との関連 —親子関係を中心として— 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 37, 73-82.

和田 実 1993 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.

依田 明 1978 家族関係の心理 有斐閣 Pp148-150.